

韻文から散文へ

——『ライナールト物語』韻文版および散文版の比較——

檜 枝 陽 一 郎

(1) 『ライナールト物語』韻文版および散文版について

中世ヨーロッパにおける狐を主人公とする動物叙事詩の系譜にあって、韻文版『ライナールト物語』(Reynaerts historie = RH) および散文版『ライナールト物語』(Historie van Reynaert die vos = Pg (Prosa Gouda)) はひじょうに重要な位置を占めている。1460年～1480年にフランドルで成立した韻文版は総行数7793行から成り、作者はわかっていない。それは主としてドイツにおける韻文版の伝承の出発点となり、その系譜は数世紀のちのゲーテの『ラインケ狐』(1793年)まで続いた。他方、これを内容的にほぼ踏襲している散文版とは1479年にオランダのゴータで成立した印刷本のことをいう。全頁数は114頁、1ページあたり27行で構成され、総語数は48707語である。当時オランダの印刷業者であったGheraert Leeuが1479年に刊行したものである¹⁾。この散文版は、その後のオランダやベルギー、イギリスにおける散文による伝承の出発点となった。散文版は、韻文版の内容をほぼ踏襲しているとはいえ、二つの際立った特徴をもっている。一つは、韻文から散文への移行であり、いま一つは写本から印刷本への移行である。印刷本への移行が本の内容なり体裁なりにどう影響したのかは別の議論に譲るとして、本論では韻文における脚韻の解消が散文ではどのように行われているか、それが物語の内容にどう影響したのかを分析した²⁾。

(2) 散文版『ライナールト物語』(Pg) の評価

散文版『ライナールト物語』が研究の対象として注目されはじめたのはようやく19世紀後半になってからであり、当時の評価はさほど高くなかった。たとえば散文版『ライナールト物語』を校訂して刊行したMuller/Logemanでさえ、その序文でこう判断している。「散文への翻案は、ほとんど翻案の名に値しない。それは『ライナールト物語』韻文版のテキストに逐一したがっている。そう、どちらかといえば一部の単語を変えて語順を変更しつつ、押韻している語を部分的に削除しただけの元々のテキストにほかならず、押韻している語はなお散文の随所に見られる。……したがって作品固有の価値ならびに作者の文学上の功績に乏しい。その仕事に特徴的なものはほとんどない。」(Muller/Logeman 1892:16、下線は強調、強調は原著者による。) 当時は、韻文がまだ随所に窺われて散文になりきっていないという論調が多かった。たとえば、「キャクストンがそれに基づいて最初の英語版(1481年)を作成したゴータ版は、古い韻文版にきわめて近いままで、韻文版の韻はなお散文版の多くの箇所にはっきりと認められる。」(Breul 1927:14) といった具合である。最近では逆に押韻の解消にとくに言及して、散文版に以前より高い評価を下しているつぎのような意見もある。「ライナールト伝承においてもっとも重要な形態上の変更は詩行から散文への移行である。移行はす

に早い時期に、1479年の散文版の印刷本で行われている。この印刷本では、しばしば詩行が散文の『下に』なお認められるものの、その後こうしたことは少なくなる。テキストは次第に固有の散文形式をとるようになる。」(Wackers/Verzandvoort 2002:154f.)。あるいは「散文がかなり忠実に韻文のテキストにしたがっている一方、押韻の解消 (ontrijming) も随所に行われている。」(Vriesema 1980:79 括弧内は筆者による補足)。しかし、こうした指摘のどれを調べても、作品全体として押韻の解消が具体的にどう行われたのかについて言及がなく、このような指摘はたんに全体的な印象を述べたに過ぎないと思われる。韻文版『ライナールト物語』が、散文版ではどのように修正されて散文化されているのかを具体的に作品全体にわたって分析する必要があるだろう。

(3) 『ライナールト物語』の詩行と文の関係について

『ライナールト物語』の韻というのは、以下の二例に示す通り脚韻による二行連句 (英 couplet) である。

(1) RH (5248 ~ 5253)

Ende hi docht myt herten <u>zere</u> :	a
God geef mijnre moeyen <u>eere</u> .	a
Sy heeft mijn rijsgen wel doen <u>bloeyen</u> .	b
Sy heeft wel aen mijn kar <u>gecroegen</u> .	b
Sy heeft my geboden wel die <u>hant</u> .	c
God danck dat sy den vont so <u>vant</u> .	c

すると彼は心中つよく思った。神様、わが叔母に榮譽を与えたまえ。叔母はわたしという小枝に花を咲かせてくれた。わたしの荷車を押すのを手伝って、しっかり手を貸してくれた。有り難いことに一計を案じてくれた。

(2) RH (689 ~ 695)

Mer die katijff en versyndes niet	
Wair Reynaert die tael <u>weynde</u> .	a
Hi volchde na, recht als die <u>blynde</u>	a
Die hem inden put laet <u>leyden</u> .	b
So lang gingen si onder hem <u>beiden</u>	b
Dat sy tot Lantfreits bynnen den <u>tuun</u>	c
Quamen. Doe verblide hem <u>Bruun</u> ,	c

しかし、哀れな者にはライナールトが発言をどこに向けたのか見抜けなかった。彼は、あたかも溝に導かれる盲人のように一緒に出向いてラントフレイトの家囲いの中に入ると、ブルーンは小躍りした。

上例 (1) のように、脚韻が二行ずつ aa、bb、cc と続くのが中世オランダ語による一般的な脚韻

であり、『ライナールト物語』も例外ではない。最初の五行を見ると、各行の行末が文末に等しい。第六行は *dat* 以下が副文であるので、厳密に言えば一つの文で一行が占められてはいないものの、行末はそのまま文末と一致している。しかし、例 (1) のように行末と文末が一致するのは、『ライナールト物語』では稀であり、むしろ行末と文末が一致しないことの方が多い。たとえば、上例 (2) の最初の押韻である「向けた *weynde*」と「盲人 *blynde*」は、句点を見ればわかるようにそれぞれ別の文に属している。つぎの韻を踏んでいる「導かれ *leyden*」と「一緒に *beiden*」も同様である。さらに、副文ではじまる第 694 行は、つぎの 695 行の途中で文が終わり、この二行で韻を踏んでいるのは文中の語である「家囲い *tuun*」とつぎの文の主語である「ブルーン *Bruun*」である。このように詩行と文の関係は作品全体で見ると、各行の行末が文末と一致している場合や、韻を踏んでいる二語が別個の文に属している場合、文中にある語が行末に来て押韻している場合など様々である。ちなみに上記の二例は散文版では以下のようにになっている。

(3) Pg (104)

Hij docht god ere mine moeye Sy heuet rijs weder begonnen doen bloeyen Si heuet zere wel aen mijn karre gecroeyen

彼は考えた。神様、わが叔母を称賛されんことを。叔母はわたしという小枝にふたたび花が咲きはじめるようにしてくれた。わたしの荷車を押すのを熱心に手伝ってくれた。

(4) Pg (18)

Mer die katijf en mercte des niet hoe reynaer dat meende Recht als een blinde die hem inden put leiden laet so volghede hi reijnaer ende si gingen alsoe lange bi malcanderen dat si tot lantferts biden thuijn quamen doe veruroechde hem heer bruijn

しかし哀れな者にはライナールトの意図がどこにあるのか見抜けなかった。彼は、あたかも溝に導かれる盲人のようにライナールトについて行った。一緒に出向いてラントフレイトの家囲いの所に来ると、ブルーン殿は大喜びした。

上例 (1) および (3) を比較すると、RH にある「心中つよく *myt herten zere*」が削除され、名詞目的語の「榮譽 *eere*」が Pg では動詞「称賛されんことを *ere*」に変えられた。その結果、件の語を削除して変更することによって対韻が解消されている。つぎの韻を踏んでいる二語 (Pg の *bloeyen* と *gecroeyen*) はそのまま残っているものの、韻文の最後の二文はまるごと削除されている。

また上例 (2) および (4) を検討すると、「発言を向けた *die tael weynde*」が「意図がある *dat meende*」に書き換えられ、691～692 行の語順が逆転している (*Hi volchde na, recht als die blynde // Die hem inden put laet leyden.* から *Recht als een blinde die hem inden put leiden laet so volghede hi reijnaer* への語順の逆転)。また、散文では副文における正しい語順である定動詞後置に定動詞の位置が変えられている (*leiden laet*)。つぎに「一緒に *onder hem beiden*」が同じ意味を表す *bi malcanderen* に代えられている。押韻している二行でそのまま残ったのは、RH の最終二行の「家囲い *tuun*」と「ブルーン *Bruun*」のみである。

韻文版と散文版について以上の二例を比較検討しただけでも、韻文における押韻が散文ではじつに様々に処理されているのが判明する。全行削除や部分的な削除があったり、一部の変更や全部の

変更があったりする。それでは、『ライナールト物語』の韻文版と散文版を全編にわたって検討すれば、どのような結果を得られるだろうか。

(4) 作業手順

『ライナールト物語』韻文版 (RH) の脚韻に関して、まず以下のような作業手順を整える必要がある。

- (1) 『ライナールト物語』冒頭の序 (1-44 行) は、『ライナールト物語』散文版に対応箇所がないので考察から外した。
- (2) 最後の 12 行 (7794 ~ 7805 行) は、書写した者の手による折り句 (acrostic) であって本来の詩行ではない。よって考察から外した。
- (3) 校訂によって挿入された行が 8 行ある (Wackers 2002:417ff 参照)。すなわち 808a、2106a、5010a、5510a、6091a、6528a、7486a、7657a である。
- (4) 孤立した一行および韻を形成していない連続する二行は考察から外した。つぎにあげた詩行がそうである。韻を形成していない連続する二行については、それぞれの行末の単語を括弧内に以下にあげた。すなわち 473、879、1026、1085、1218/1219 (verdriet/strick)、1336、1601/1602 (ontgaet/na)、1607/1608 (geheel/steen)、1613/1614 (geruchte/struuck)、1617、1658、3098/3099 (my/vaert)、3320/3321 (can/slichten)、3668、4667、4780/4781 (meer/iudicare)、4958、4975、5247、5416、5495、5561、5688、5879、6070、6368、6443、7133、7402/7403 (bunsinck/genetkijn) の 37 行である。

したがって、考察の対象となった対韻の個数は、7805 - 44 ((1)による) - 12 ((2)) + 8 ((3)) - 37 ((4)) を 2 で割ったもの、すなわち $7720 \div 2 = 3860$ となる。

(5) さまざまな事例分析

『ライナールト物語』韻文版と散文版を全編にわたって比較検討すると、韻を踏んでいる二語の取り扱いについて以下のように類別することができる。つぎに示した ABC の分類は実際に比較した結果であるものの、おそらく理論上もこれ以外の可能性はないと思われる³⁾。

- A 対韻をなす語が残らない場合
- B 対韻をなす語が一つ残る場合
- C 対韻をなす語が二つとも残る場合

A 対韻をなす語が残らない場合

対韻をなす語が残らない場合としては、①二つとも削除されている例 ②二つとも変更されている例に分けられる。第一の場合には、さらに二つの下位分類(a)(b)が可能である。

①二つとも削除されている例

(a)韻を踏んでいる行全体が削除されている場合

(5) RH (6940 - 6953)

Ic sel dair om dencken', sprac Reyneert,

'Ende huden alsulcke eer bejagen

Dat gi ende alle mijn magen

Dess eer selt hebben ende mijn viant

Scade, toorn ende groot scand,

Alle die dage die sy leven.

Hert, syn en moet begint hem te verheven.

Ic denct hem so te brengen by,

Als wi te samen sijn te kry,

Dat hi en sel niet weten daer

Wair hi hem hueden sel voorwaer.

Ic selt hem so na leggen myt list,

Twaer scade dat hi al dinck wist.'

Si sprac:'God gunst di, nevelinck.'

「思い出すつもりです。」とライナールトは言った。「それに今日は、貴方とわたしの一族全員が面目を保ち、わたしの敵が来る日も来る日も生涯にわたって屈辱と苦悩、大恥を味わうという栄誉を勝ちとるつもりです。心臓や感覚、気持ちが高ぶりはじめました。われわれがともに決闘場にいれば、奴がじっさいどう防御すべきかわからないほど、奴にみっちり教えてやります。策略でもって痛めつけます。奴がこれらをすべて承知なら、残念に思います。」彼女は「神の恵みあれ、愛しき甥よ。」と返した。

Pg (138)

Ic sal daer gheerne om dencken Ic hope huden alsulcke eere te beiaghen dat ghi ende alle mine

maghen des eere sult hebben Ende mijn vianden toern scade ende scande Si sprack god ghunt v

「喜んで思い出すつもりです。今日は、貴方とわたしの一族全員が面目を保ち、わたしの敵たちが苦悩と屈辱、恥を味わうという栄誉を勝ちとるのを望んでいます。」彼女は「神の恵みあれ。」と返した。

この箇所は、狐ライナールトが狼のイセグリムとの決闘の直前に、狐が自分の一族である雌猿のルーケナウと決闘に勝つための作戦を練る場面である。最初の第6940行の「ライナールトは言った。sprac Reyneert」と最後の「愛しき甥よ。nevelinck」の文言が省略されているのはさておき、やはり注目すべきは、下線を引いた6945～6952行がまるごとPgでは削除されたことであろう。狐の発言の末尾がそっくり削除されてから、雌猿ルーケナウの発言という新たな段落に移行している。行全体が数行にわたって削除されるのには、押韻の解消という目的というより、物語のあら筋を変える目的があると思われる。この場合、決闘の緊張感を高めるために、ライナールトの発言を簡潔にしたのであろう。

(6) RH (3553 - 3561)

Dair en sel nyement over die heide
 Dorren varen noch oec keren,
 Sel Reynaert noch dus lang regneren.
Hier coomt Corbout ende Scerpenebbe
Die oec zeer grote clage hebbe.'

Recht doe dese tael was vertogen,
 Quam Corbout, die roeck, gevlogen
 Voor den coninck in tgedinge
 Ende sprac:

ライナールトがなお長くこうしてのさばるなら、誰もあえて野原を往来しようとしなんでしょう。同じように、ひじょうに重大な訴えを抱えたコルボウトとスケルペンエッベもここに来ています。」
 ちょうどこう言挙げされたとき、鳥のコルボウトが法廷にいる王様の御前に飛んできて言った。

Pg (70)

daer en sal nyemant ouer die heyde varen noch keren dorren sal reynaer aldus langhe
 regnyeren ende sijn quade regiment hantieren
 [Cap. X X IV .] Hoe corbant die roeck ouer reynert claecht vander doot van sinen wiue
 REcht doe die woerden ghesproken waren. doe quam daer corbant die roec gheuloghen inden
 ghedinghe voer den coninc ende sprack.

ライナールトがなお長くこうしてのさばり、悪しき支配を行うなら、誰もあえて野原を往来しようとしなんでしょう。

[X X IV . 章] 鳥コルボウトが妻の死についてライナールトを提訴した次第

ちょうどこの発言がなされたとき、鳥のコルボウトが法廷にいる王様の御前に飛んできて言った。

『ライナールト物語』後半の冒頭で、新たな訴えが王様の御前で起こされた場面である。上例の RH および Pg を比較すると、「同じように、ひじょうに重大な訴えを抱えたコルボウトとスケルペンエッベもここに来ています。」という RH の二行が抜け落ちているのがわかる。この場合、以下の点に留意する必要がある。「ちょうどこう言挙げされたとき Recht doe dese tael was vertogen」という第 3558 行は新しい段落における最初の行である。新しい段落は、原文では REcht のように最初の二文字を大文字書きして表現され、RH の刊行本では一字下げた表記を採用している。Pg はほとんどの場合、RH の段落の区切りに沿って章立てをしているので、Pg の新しい章はちょうどこの段落の区切りからはじまる。そう考えると、新しい章に入る前に前章の末尾の体裁を整えて、RH の末尾 2 行が削除されたのだろう。また、コルボウトとは鳥の名前で、スケルペンエッベはその妻の名前である。しかし、この時スケルペンエッベはすでに狐に騙されて殺害されており、コルボウトとともに宮廷にやって来たのはその羽毛だけであった。したがって RH にある「同じように、ひじょうに重大な訴えを抱えたコルボウトとスケルペンエッベもここに来ています。」という詩行は物語のあら筋からすると誤りであり、Pg ではこの誤りを修正する必要があった。そのためスケルペンエッベを削除して、その代わりに章の表題に「妻の死 doot van sinen wiue」と記したのだと考えられる。

(7) RH (3751 - 3755)

'Ja wi',riepen si gemeenlic zeer,
'Wanneer gi vaert,wi volgen u,heer,
Al sout ons costen lijff ende goet.
Hier op, heer coninc,weest wel gemoet.'

Dit hoorde Grymbaert,die das.

「やりましょう」と一同は大声で叫んだ。「出発される時は従います、わが君。命や財産を失おうとも。ですから、わが君王様、元気を出してください。」穴熊のグリムバルトはこれを聞いていた。

Pg (74 - 75)

ende si riepen alle ghemeenlic ia wi heer coninc wanneer dat ghi wilt so willen wi alle mit v varen

[Cap. X X VI .]Hoe grymbert die das reynert waerscuwede. want die coninck op hem vertoernt was. ende hem doden woude

ALle dese woerden die hoerde grymbert die das.

すると彼ら一同は叫んだ。「やりましょう、わが君王様、お望みの時に全員で出陣します。」

[X X VI . 章] 穴熊グリムバルトがライナルトに警告した次第、王様が彼に激怒して殺害するつもりであったから。

穴熊のグリムバルトはこれらの発言を全部聞いていた。

同様に上例 (7) も、RH の段落の最後にある二行が Pg ではまるごと省略されて、つぎに新しい章立てがなされたあとに物語が続いている。したがって、韻文から散文へと移行に際して押韻を解消するためというよりも、むしろ物語のあら筋において新たな章の前後の体裁を整えるために、行全体が削除されていると想定できるだろう。

(8) RH (694 - 698)

Dat sy tot Lantfreits bynnen den tuun
Quamen. Doe verblide hem Bruun,
Mer het is dic also gesciet,
Dat hem die mennich verblijt om niet.

Nu mochedy horen van Lantfreit.

一緒に出向いてラントフレイトの家囲いの中に入ると、ブルーンは小躍りした。しかし、多くの者がぬか喜びするのはよくあること。ところでラントフレイトのことをお耳に入れましょう。

Pg (18)

dat si tot lantferts biden thuijn quamen doe veruroechde hem heer bruijn Nv hoort van lantfert
一緒に出向いてラムフレイトの家囲いの所に来ると、ブルーン殿は大喜びした。ところでラムフレイトのことをお聞きあれ。

「しかし、多くの者がぬか喜びするのはよくあること。」という二行全体は、物語の成り行きとは

関係のない、いわば挿入句として入れられたものである。散文である Pg の作者には冗長であり、そのため削除したと考えるのが妥当であろう。

(b)脚韻のみ削除されている例

(9) RH (5116 - 5119)

Rybauden, boeven ende cockynen

Hebben dair zeer vercoren om.

Sy geven hem apel haerre som

Die sy gecrigen ter luden huus.

遍歴者や浮浪人、怠け者などがとても重宝しています。彼らは、人家でもらった林檎をいくつか彼に贈ります。

Pg (102)

die cockinen boeuen ende rybauden die hebbenen zere wtuercoren Si gheuen hem vette telgueren ende appelen die si ter goeder luden huuse crighen

怠け者や浮浪人、遍歴者などがとても重宝しています。彼らは、良家の人々の家でもらった脂の乗った料理や林檎を彼に贈ります。

RH の 5117 ~ 5118 行では、om と som 「いくつか」が押韻している。この om はその行の前にある daer と関連しており、韻を合わせるために通常の daerom 「それについて」の形を分離させている。訳文では「それについて」が省略されている。それ以外に散文の Pg を見ると、daer と om の代わりに代名詞目的語 (hebbenen の最後の -en の部分) が添加され、動詞が同じ意味の wtuercoren に変えられた。また「いくつか」を意味する som が抜かれている。その結果、本来韻を踏んでいた二行が消失した。Pg では脚韻を窺わせないための工夫が施されている。

(10) RH (5383 - 5391)

In allen hoofzweer ende swairhede,

Off inden lichaem enich ongesond

Die van versumentheit comen cond,

Van vergiffenisse ende venijn,

Off enige ziekte die mach sijn,

Lanc evel, gycht ende tysike,

Fistel, kancker ende artike,

Ende alle siechte sonder die doot,

どれほどの頭痛や倦怠感があっても、また不注意やら中毒やら毒物から生じたどんな体の疾病も、いかなる病気であっても、疝痛、痛風、労咳、瘰、癌、足痛風など、死ぬ以外の病気はすべてです。

Pg (107)

ya meer alle hoeftsweringe ende enich ongesonde inden lichame die van enich versumene comen mochten van vuytre spisen van quaden wiue van vergiffenisse. van lanck oeuele gichte

fistel of cancker yae alle siecheden sonder die rechte doot

ええ、それ以上にどんな頭痛も、なにかの不注意やら腐った食事やら悪妻や中毒から生じたどんな体の疾病も、疝痛や痛風、瘻、癌も、ええ本当に死ぬ以外、病気はすべてです⁴⁾。

狐ライナールトが指輪に埋められた石の効能を語り、六つの病気に効能があると説く場面である。韻文と散文を比較すると、韻文のちょうど行末で押韻している「労咳 *tysike*」と「足痛風 *artike*」の二語が散文では削除されているのがわかる。六つの病気が言挙げされているのが冗長なため、また韻を解消するためにも、押韻している二語を削除したのだと思われる。

(11) RH (7389 - 7395)

Vrou Rukenau die blide was,

Ende huer twee susteren quamen daer,

Biteluus, Vuylromp, hair twe kijnder claer,

Hatenet, hair dochter, die derde mede,

Die vledermuys ende twesel dair ter stede.

Dar quammer twijntich meer, ic waen,

Dan oft Reynaert inden camp had mysgaen.

喜んでいるルーケナウ夫人とその二人の姉妹がやってきた。晴れやかなその子供たち、ビテルースとファイルロンプの兩名、末娘のハーテネットもいっしょであった。コウモリとイイズナもその場に来て、思うに、ライナールトが決闘で負けていた場合よりも、二十匹以上も余計にやってきただろう。

Pg (147 - 148)

Ende vrouwe rukenauwe met horen twee susteren Met biteluys ende vuylromp hoer twee soenen ende hatenete hoor dochter. die vledermuys ende die wesel Ende daer quammer meer dan twintich die daer niet gecomen en souden hebben haddet sake gheweest dat reynaert die camp verloren hadde

ルーケナウ夫人とその二人の姉妹、息子のビテルースとファイルロンプの兩名、娘のハーテネット いっしょであった。コウモリとイイズナも。ライナールトが決闘で負けていた場合には、来なかったであろう者たちが二十匹以上もやってきた。

狐のライナールトが狼との決闘に勝利したのち、狐の一族が寄り集まってきたところである。RHを見ると、各行の行末を押韻させるために「晴れやかな *clear*」あるいは「いっしょ *mede*」、「その場に *stede*」、「思うに *waen*」、「負けていた *mysgaen*」などが付加されて韻文が作られているという印象を受ける。Pg ではそうした文が修正されたものの、文としては主語を並列させただけの動詞のない不完全な文になっている。

(12) RH (3645 - 3648)

Dair heeft mennich ooc groot scade

By geleden ende groten tooren.

Ic gebiede ende bidde te voren

Hem allen die geren die hulde mijn,

Sijn si hier off wair sy sijn,

大勢の者が大損害や甚だしい悲哀を蒙っている。わが恩寵を求めるすべての者たちに、この場にいる者も、どこにいる者でも、あらかじめ命令し、またそう求める。

Pg (72 - 73)

daer oec menige grote scade bi gheleden is. Ick bidde ende ghebiede. alle die ghene die mijn vrientscap ende mijn hulde begheren. sijn si hier of waer si sijn

ほかにも大損害を蒙っている。わが友情と恩寵を求めるすべての者たちに、この場にいる者も、どこにいる者でも、命令し、またそう求める。

押韻している「悲哀 tooren」と「あらかじめ voren」が散文では削除されているのがわかる。「悲哀 tooren」と並列している「損害 scade」が「蒙っている geleden」の目的語となっているので、「悲哀 tooren」を削除しても文としては問題がない。また「あらかじめ tevoren」は副詞であるので、散文において削除しても文法上の問題は起こらない。

A ②二つとも変更されている例

(13) RH (707 - 710)

Des was Reynaert harde blide,

Want dat was recht na sijn begeer.

Al lachende sprac hi totten beer:

'Merct nau toe ende neems wel goom.

ライナールトは大喜び、これがまさに彼の願うところ。彼は笑いながら熊に話しかけた。「はっきり見てください、よく注意して。」

Pg (19)

des was reynaer ouerblide. want hi vant dat recht na sijn wensche Ende hi sprac brune al lachende an Siet nv nauwe toe

ライナールトは大喜び、これがまさに望むところであったから。彼は笑いながらブルーンに話しかけた。「ほら、はっきり見てください。」

ライナールトが熊のブルーンに、膨大な蜂蜜があると偽ってペテンにかける箇所である。韻を踏んでいる「望むところ begeer」がほぼ同義の wensche に代えられ、また「熊に beer」が熊の固有名の「ブルーンに brune」に意図的に変更されて韻が解消されている。逆に言えば、このように意識して押韻を変えなければ、押韻がそのまま残ることになる。

さらに、脚韻の一つを変更して、もう一つを削除した例も見られる。①の二つとも削除されている例と②の二つとも変更されている例の中間にあたる。ただ結果的には、対韻がすべて消えることになるので便宜上この部類に入れた。その事例の二、三を以下にあげた。

(14) RH (5645 - 5651)

Dat seer myt nyde was besmet
 Op enen hert die liep int wout,
 So licht, so snel, dat mennichfout
 Den peerd op wies den toren,
 Om dat hi altoos liep voren
 En hetten niet cond versnellen.

身軽で足も速く森を駆ける鹿にはげしく嫉妬していました。いつも先を走っていて追い越せないの
 で、馬はたびたび怒りを募らせていました。

Pg (112)

(een paert)ende zere nydich op een hert dat inden velde liep. ende liep so lichtelike ende so
 snellike Also dat dat paert hem toornde om dattet hem altoos so voere liep ende hijt niet
 versnellen en mocht

(馬は)野原を駆ける、身軽で足も速い鹿にはげしく嫉妬していました。いつも先を走っていて追
 い越せないの、馬は怒りを募らせていました。

上例では、韻文において「森 wout」と「たびたび mennichfout」が押韻している。それが散文で
 は「森 wout」が「野原 velde」に変更される一方、「たびたび mennichfout」という語が削除され
 て、結果として押韻していた二語が散文では消失したように見える。たしかに鹿が森よりも野原を
 駆けるという方が適切な表現だと思われ、押韻の解消と言うよりもより適切な表現を求めたと考え
 られるかもしれない。逆に、韻を解消するのが先にあり、その結果としてより適切な表現に変えた
 こともありうるだろう。

(15) RH (3201 - 3205)

Mer dat gi hem hebt gesworen,
 Dat gi selt varen over zee
 Ende dair te bliuen ummer mee,
 Dats dair ic my aen stoot meest.'

しかし、貴方が海外に出てずっとそこに滞在すると誓ったのは、一番まずいと思うのです。

Pg (64)

Mer dat ghi hem gesworen hebt dat ghi ouer meer varen selt ende daer bliuen. dat is daer ic mi
 meest an stoete

しかし、貴方が海外に出てそこに滞在すると誓ったのは、一番まずいと思うのです。

上記の (15) では、韻を踏む「海 zee」をあえて同じ意味の「海 meer」に代えて、韻の解消を図っ
 ている。他方、いま一つの「ずっと ummer mee」は散文では省略されている。meer と似た音であ
 る meer を嫌ってそうしたのかどうか、はっきりしない。

B 対韻をなす語が一つ残る場合

対韻をなす語が一つ残る事例としては、韻を踏む行末の二語のうち①一つを削除して一つを残している例と、②一つを変更して一つを残している例に分けられる。①の事例をいくつかあげよう。

(16) RH (5651 - 5654)

Hem dochte, het soude hem neder vellen,

Al sout hem dair om raden we.

Ic wil u seggen noch voort mee.

Het ghinc ende sprac enen herde aldus aen:

自分に災難が降りかかってでも、鹿を打ち倒そうと考えました。さらに続きを申し上げます。馬はある羊飼いの所へ行って話しかけました。

Pg (112)

het docht hi soudet neder trecken Al soude hij hem noch soe wee daerom gheraden Dat paert sprac enen harder aldus aen

自分になお災難が降りかかってでも、鹿を叩き伏せようと考えました。馬はある羊飼いに話しかけました。

上例の (4) のように、5653 行全体がいわば挿入句として入れられて、一行全体が削除されている反面、もう一つの韻を踏む「災難 wee」はそのまま残している。挿入句は韻を合わせるために挿入されているので、散文ではそれを削除したと考えるのが妥当である。

ほかに na mynen waen (思うに) (RH 326)、na mynen waen (思うに) (RH 1252)、ic seg v hoe (どうするのか話しておこう) (RH 2790)、Wat holpt dat ict maecte lanck? (話を長くしてなんの役に立つだろうか) (RH 2918)、sel di weten (ご存じのように) (RH 4454)、ic segget sonder twy (断言しますが) (RH 4669)、noem ic voren (最初にお話しします) (RH 5321)、Mer v en gedencs so ic waen (お忘れかと思えます) (RH 6044)、als gi selt weten (ご承知だと思えます) (RH 6079)、gi sult weten (ご承知ください) (RH 6270)、ic waen (思えます) (RH 6436)、alst wel aenscheen (まさにはっきりと見えたのだが) (RH 7339)、die ic noemde hier te voren (以前名前のあがった連中) (RH 7405) など、押韻のために挿入されている短い語句は散文では削除されている。

(17) RH (5228 - 5232)

Mer hi was so door fel

Dat hi dair na niet horen en woude.'

Die lupaert Fyrapeel, die boude,

Sprac:' Heer, gi moget niet nochtan

Veerre rechten dan wisen u man,

「しかし彼(王様)は激怒されていてお聞きになろうとされませんでした。」大胆な豹フィラペールが言った。「わが君、とにかく顧問団のお歴々が判定する以上の判決をお出しになってはなりません。」

Pg (104)

Mer hi was so felle dat hi daer niet nae horen en woude Die lupaert fyrapeel die seide oeck mede. heer coninc ghi en moget niet vorder rechten dan v manne en wysen

激怒されていてお聞きになろうとされませんでした。」豹フィラペールも口を挟んだ。「わが君、王様、顧問団のお歴々が判定する以上の判決をお出しになってはなりません。」

この例の場合も、5230行にある「大胆な die boude」は前行の woude に合わせるために添加されたものだと考えられる。散文では冗漫だと受け取られて削除された。

そのほか同様に、coppen die vroede (RH 359) (賢明なコッペ)、coppen die mare (RH 445) (有名なコッペ)、Ysegrim, die snelle (RH 1876) (すばしこいイセグリム)、Mit Reynaert, den scalcken roden (RH2025) (赤毛の悪党ライナールトとともに)、hem ontbieden den rode (RH 3738) (あの赤毛を召喚しよう)、Ermelijn, die wise (RH 3838) (あの賢妻エルメリン) などで添加された下線部の語句が削除されている。

(18) RH (766 - 771)

Doe quam Lantfreit ende vant den beer

Gevaen. Doe ginck hi lopen zeer

Dair hi wist sijn gebueren naest,

Ende riep aldoe mitter haest:

'In mijn hoff is een beer gevaen!'

Dese maer spranc uut wel saen.

そこヘラントフレイトがやって来て熊が捕まっているのがわかると、一番近い隣人のいる所へすぐ突っ走って、息せき切って「屋敷で熊が捕れた。」と叫んだ。この知らせはすぐに広まった。

Pg (20)

ende lantfert dye quam ende vant den beer gheuanghen Doe ghinck hy haestelic lopen daer hi die ghebuere wist ende seide Coemt allegader in mynen hof daer is een beer gheuanghen Die mare die spranck over al den dorp.

そこヘラントフレイトがやって来て熊が捕まっているのがわかると、隣人のいる所へ急いで突っ走って、「みんな来てくれ、屋敷で熊が捕れた。」と告げた。この知らせは村中に広まった。

これは行末の短い副詞が削除された例である。上例のほかには zaen, saen (英 soon) (RH 92,426, 573,771,1259,2584,3119,6676,6967)、zeer (独 sehr) (RH 447,5069,5921)、bede,beide (独 beide) (RH 155,802,3440,3567)、mittien (独 gleichzeitig) (RH 807,7506)、nu,nv (独 nun) (RH 605,1108,1482)、wel,wael (独 wohl) (RH 3424,5613)、mede (独 mit) (RH 5623,6134) などがある。これも前例 (17) と同様に、副詞が韻を合わせるために行末に置かれたもので、散文では削除されたのだと思う。

②韻を踏む行末の二語のうち、一つを変更して一つを残している事例は、つぎの通りである。

(19) RH (6396 - 6400)

Ic sel u doen sulke informaci

Mit goeden gelovelic orcond,

Dat gijs my al u levens stond

Wel selt geloven ende u baroen.

Wat heb ic mitten wolve te doen,

Of ander sijnre geliker katyve.

適切で信ずべき証拠をもって事情を明らかにしましょう。貴方やお歴々の方々は、生涯にわたってわたしを固く信頼できるでしょう。わたしが狼や、ほかの同類の悪党たちと何の関係があるでしょうか。

Pg (126)

Ick sal v alsulcke informaci doen mit goeder gheloefliker orconde. dat ghijs mi al v leven lanc wel ghelouen sult met al uwen raede. Wat hebbe ick metten wolf te doen

適切で信ずべき証拠をもって事情を明らかにしましょう。貴方や顧問団の方々はみな、生涯にわたってわたしを固く信頼できるでしょう。わたしが狼と何の関係があるでしょうか。

韻文ではそれぞれ「証拠 orcond」と「生涯に stond」、「お歴々の方々 baroen」と「関係 doen」が押韻している。他方散文では、「証拠 orconde」を残しながら「生涯に stond」は同義の lanc に、また「関係 doen」を残しながら「お歴々の方々 baroen」は「顧問団の方々 raede」に変更されている。こうした変更は、韻の解消をはかった明確に意図的なものであるのがわかる。A および B、C の事例を全編にわたって比較した結果を第一表にまとめた。

第一表

対韻	A ①二つ削除	A ②二つ変更 ないし一つ削 除一つ変更	B ①一つ削除、 一つ残す	B ②一つ変更、 一つ残す	C 二つ残す	計
個数	243	359	1101	669	1488	3860
百分率	6,3%	9,3%	28,5%	17,3%	38,6%	100%

これまで考察を加えてきた A の対韻をなす語が残らない場合の割合は 15,6%、また B の対韻をなす語が一つ残る場合の割合は 45,8% であった。一般的に韻を解消するといえば、何かしらすべての韻を削除するかのように思いがちであるが、少なくとも『ライナールト物語』韻文版と散文版を比較してみると、そうした例は 15,6% と少ないことが判明した。その反面、対韻をなす語が一つ残る場合の割合が 45,8% とほぼ半分を占め、最大の割合となった。押韻の半分は、韻を踏む一語を残しながら散文へと書き換えられたというのが実情である。

さらに、押韻の解消という点から見て第一表で特筆すべきなのは、韻を踏む二語がそのまま残っている例が 38,6% とほぼ四割を占めていることである。前述した 19 世紀後半から 20 世紀前半にかけて散文版に下されたような、「押韻している語はなお散文の随所に見られる。」(Muller/Logeman 1892:16 前出) とか、「韻文版の韻はなお散文版の多くの箇所にはっきりと認められる。」(Breul 1927:14 前出) といった低い評価はここに依るのであろう。しかし、件の事例を子細に検討してみると、さまざまな工夫によって押韻の解消が意図的に図られていることが判明する。対韻をなす語が二つとも残っている事例についてより詳細な分析を以下に行いたい。

(6)対韻をなす語が二つとも残っている例の分析

対韻をなす語が二つとも残っている例を分析した結果、それらは以下の(a)から(i)までの九通りのタイプに分類できることが判明した。事例を追いながら、韻の解消がどう行われているかを検討したい。

(a)押韻している語のつづり方を少し変更した例

(20) RH (2112 -2117)

Dair verbeet ic haerre twee.

Doe tast ic voort ende deed meer,

Ende ic wart boude ende koenre

Ende ic verbeet vogel ende hoenre

Ende ganse dair ic se vant,

So dat my bloedich wart mijn tant.

二頭を噛み殺したほどでした。その後も捕食をつづけ、いっそうすすんで、わたしはいっそう大胆不敵になりました。鳥や鶏、アヒルを見つけ次第に噛み殺したので、歯が鮮血で染まったほどです。

Pg (44)

ende ic verbeter daer twee. ende ic wort alle tijt coenre Ic verbeet voghelen hoenren ende gansen waer dat icse vant Aldus so worden mijn tanden bloedich.

二頭を噛み殺しました。わたしはどんな時もいっそう大胆になりました。鳥や鶏、アヒルを見つけ次第に噛み殺したので、歯が鮮血で染まったほどです。

ここでは「大胆 koenre」と「鶏 hoenre」および「見つけ次第に vant」と「歯 tant」が韻を踏んでいる。散文では「鶏 hoenre」が「鶏 hoenren」に変えられている。-re および -ren はどちらも中性名詞の複数語尾であり⁵⁾、coenre との押韻を避けるためにもう一つの複数語尾を用いている。また「歯 tant」は複数形の tanden に変えられ、「見つけ次第に vant」との押韻を打ち消している。

(21) RH (3647 - 3654)

Ic gebiede ende bidde te voren

Hem allen die geren die hulde mijn,

Sijn si hier off wair sy sijn,

Dat sy myt werken ende myt rade

My helpen wreken dese overdade,

So dat ics blive in mijnre eer

Ende ons dat vuyle wicht niet meer

Te spot en drive ende oec te schern.

わが恩寵を求めるすべての者たちに、この場にいる者も、どこにいる者でも、この蛮行に報復するにあたって、行動と助言をもって支援してくれるようあらかじめ命令し、またそう求める。わしの

名誉が汚されぬよう、また不埒な輩が二度とわれらを嘲笑したり、笑い物にしたりしないように。

Pg (72 -73)

Ick bidde ende ghebiede. alle die ghene die mijn vrientscap ende mijn hulde begheren. sijn si hier of waer si sijn Dat si mit raede ende mit wercken mi wel helpen wreken dese grote ouerdaet. so dat ic in eeren bliue ende ons dese scalck in spotte onser heerliker eeren niet meer en beroue

わが友情と恩寵を求めすべての者たちに、この場にいる者も、どこにいる者でも、この蛮行に報復するにあたって、助言と行動をもって支援してくれるよう命令し、またそう求める。わしの名誉が汚されぬよう、またこの悪漢が二度とわれわれの崇高な栄誉を嘲笑して奪うことがないように。

韻文ではそれぞれ「助言 raede」と「蛮行 overdade」、「名誉 eer」と「二度と meer」が韻を踏んでいる。ところが散文では同じ語が使われているものの、「蛮行 overdade」が ouerdaet に変更された。Dade と daet はともに「行い」を意味する別々の語であり、ouerdaet が一般的な形態である⁶⁾。また「名誉 eer」は複数形の eeren にわずかに変えられ、押韻を打ち消そうとした意図が窺える。こうした試みは意図的にしなければ不可能であり、たんに偶然とするのはありそうもない。

(22) RH (4145 - 4151)

Ic heb en bin van allen gelaten.

Dat wil ic van my steken ende haten.

Al dat mynre is dan Got,

Ende hoge clymmen boven sijn gebot

Ende bescouwen der contemplacien.

Mer dese sonderlinge gratien

Gescien my als ic bin alleen,

一切を捨て去り、また一切から捨て去られる。神より劣る一切のものを嫌悪して決別し、神の戒律以上の高みに昇り、瞑想に浸ろうとする。しかし、この特別な恩寵にあずかれるのは、一人になって世の中とも人間とも交わらず、自分のことをはっきりと内省するときだけ。

Pg (82)

Ende ic ben dan in een verdriet Ic hebt nv al ghelaten. ende hate alle dinck dat god niet en is: Ende ic climme hoghe in bescouwender contemplacien bouen sijn ghebode. mer dese sonderlinghe gracie die geschien mi als ic alleen ben.

そしてわしはひどい状態となり、いまや一切を捨て去り、神ではないもの一切を嫌悪して、瞑想に浸りながら神の戒律以上の高みに昇ろうとする。しかし、この特別な恩寵にあずかれるのは、一人になったとき。

この箇所はライナールの神秘主義といわれる部分である⁷⁾。韻文ではそれぞれ「捨て去り、捨て去られる gelaten」と「嫌悪して haten」、「神 Got」と「戒律 gebot」、「瞑想 contemplacien」と「恩寵 gratien」が押韻している。散文では、もとの不定詞の haten が定動詞の hate に、「戒律 gebot」が同義であるものの別の接尾辞から形成された別の語である ghebode に⁸⁾、さらに「恩寵 gratien」

が *gracie* と *-n* の無い形に変化して、それを指示代名詞の *die* で受け直している。*Gracie* はふつう単数形であるものの、定動詞は複数形であるので (*geschien*)、単数なのか複数なのかははっきりしない。あるいは文法上の単数形を複数扱いにしたのかもしれない。

(b)押韻している語の異形を用いた例

(23) RH (3303 - 3306)

Ende beval hem als ende als,

Dat hi niet die brieve en zoude

Besien, off hij gern woude

Tot des conincs vrientscap naken.

昵懇となって王様と近づきになりたければ手紙を覗いてはならぬと強く念を押した。

Pg (66)

ende hi beual hem dat hi die letteren niet besien en soude wilde hij des conincs vrientscap hebben

王様と昵懇になりたければ手紙を覗いてはならぬと念を押した。

(24) RH (1181 - 1183)

Dus deden sy hem op die vaert

Ende gingen, eer si op hilden,

Ter stat dair sy wesen wilden.

そうして彼らは歩きだして、立ち止まらずに望んでいた所までずっと進んだ。

Pg (27)

Aldus ghinghen si hene eer si op hilden totter stat daer si wesen wouden

そうして彼らは歩きだして、立ち止まらずに望んでいた所までずっと進んだ。

(23) の例では、韻文版は *zoude* (独 *sollte*) と *woude* (独 *wollte*) が韻を踏んでいる。散文版では同じ単語が用いられているものの、一方の *woude* を異形である *wilde* に変えて押韻を打ち消している。他方、*hilden* (独 *hielten*) と *wilden* (独 *wollten*) が韻を踏んでいる (24) の例では、*wilden* に変えて異形の *wouden* を用いて押韻を打ち消している。それぞれの韻の状況によって同じ語である *wilde* と *woude* を使い分けていることは、散文版の作者が意図的に韻の解消を図っていたことを証している。一部の文法書では、*wilde* が中世オランダ語においてより西部地域の形態であり、*woude* がより東部地域の形態であるとされてきた⁹⁾。しかし、同じ文献で *wilde* と *woude* が使い分けられている上例 (23) (24) からすると、地理的な分類というより、韻の解消というテキスト内部の事情による使い分けにも留意すべきである。

(25) RH (3341 - 3344)

Die coninc wonderde vanden doen,

Dat hi die scerpe weder brochte,

Dair Bruun die beer so onsochte

Te voren om was gedaen.

王様は、かつて熊のブルーンが手荒く扱われることになった巡礼袋を、彼がふたたび持ち帰った様子に愕然とした。

Pg (66)

Die coninc verwonderde also hi sach dat hi die male weder brochte daer brunen den beer te voeren so onsafte om gedaen was

王様は、かつて熊のブルーンが手荒く扱われることになった巡礼袋を、彼がふたたび持ち帰った様子に愕然とした。

韻文では「持ち帰った brochte」と「手荒く onsochte」が押韻している。それに対して散文では onsochte が異形の onsaftte に代えられて韻が消されている。子音結合の ft から cht への変化は、とくに中世オランダ語の南西部に見られる変化だという。それに対して変化しない -ft 形は北ホラント方言、南ホラント方言、ユトレヒト方言、一般に東部中世オランダ語、ケンペンまでの北ブラバント方言に見られるという¹⁰⁾。Pg が成立したゴータは南ホラントに位置するので、Pg の作者は韻の解消とともに、自分の土地の方言形に修正したとも言える。同様の例には RH 5159/5160:onsochter/dochter → Pg(102):onsachter/dochter における o から a への母音の変更がある。ちなみに RH 748/749: mochte/brochte → Pg (19):mocht/bracht、RH 6182/6183:brocht/gerocht → bracht/geruchte のように brocht(e) が bracht に変更された例もある。前例 (23) および (24) と同様、従来 bracht/brocht の違いは地域的な相違だと考えられてきたものの、そうした地域的な意味合いはここでは考えられない¹¹⁾。

そのほか異形に変更した事例をあげておく。vaen → vang(h)en (RH 1194, 1890, 6340)、gevaen → gevang(h)en (RH 945, 1251, 3100, 4867, 5655, 6162)、ontvaen → ontfang(h)en (RH 1210 (Infinitive), 4593 (Infinitive), 4969 (part.praet.), 5608 (Infinitive), 7694 (part.praet.)), stoet → stont (RH 2227, 4280, 6208, 7176)、plien → pleg(h)en (RH 7517, 7666 (pliet → plegen wil)), gangen → gaen (RH 5313, 6583)、名詞の場合は liede → luden (RH 7773)、gesind → gesinne (RH 7616)、merck → marck (RH 2631, 3606) など。

(26) RH (7580 - 7585)

Siet dat gi alle rechtveerdicheit

Hantiert ende my getruwe sijt.

Ic wil voort meer tot allre tijt

Altoos wercken bi uwen rade.

Hy en leeft niet die u mysdade,

Ic en sout scerpelic ouer hem wreken,

万事を公正にあつかい、わたしに忠実でいるようにしなさい。これからはつねに何事についてもお前の進言通りにするつもりじゃ。お前に危害を加えようとする者で、わたしが厳しく報復しない者など誰もいないはずじゃ。

Pg (152)

ende siet dat ghi alle gerechticheyt hantiert ende weset mi trouwe Ic wil voort aen tot alre tijt bi uwen raede wercken ende doen ende laten Hi en leeft niet die v misdede Ic en soude dat scerpeliken op hem wreken

また万事を公正にあつかい、わたしに忠実でいるようにしなさい。これからはつねにお前の進言通りにして、したりしなかつたりするつもりじゃ。お前に危害を加えようとする者で、わたしが厳しく報復しない者など誰もいないはずじゃ。

中世オランダ語の繫辞には *sijn* と *wesen* がある。韻文での「いるように *sijt*」が散文では命令形に変えられて *weset* が使われた。この場合の *wesen* は、異形というより別語とも考えられる。「危害を加えよう *mysdade*」における接続法過去形の *mysdade* と散文にある *misdede* はともに見られる形であるものの、韻を解消するために散文では *misdede* を用いている¹²⁾。

(c)動詞の強変化と弱変化の違いを利用した例

(27) RH (4612 - 4614)

Ic weet wel, hi en weigert my niet

Ende trecht is elken swair genoech."

Heer coninc, doe ic dit hoorde, ic loech.

「彼（王様）が断らないのはわかっておる。正義は誰にとっても十分厳格なものだからじゃ。」わが君、王様、こう聞いたときわたしは満面の笑みでした。

Pg (91)

Doch neue bidt mijn here den coninck dat hi v recht gheschien laet ick weet dat wel dat hi v dat niet weygheren en sal. want dat recht dat is elken swaer ghenoech Heer coninc doe ick dit hoerde lachede ic.

しかし甥よ、お前に法を行わせるよう、わが君王様に頼みなさい。わしを断らないのはよく分かっておる。正義は誰にとっても十分厳格なものだからじゃ。わが君、王様、こう聞いたときわたしは満面の笑みでした。

韻文では「十分 *genoech*」と「満面の笑み *loech*」が押韻している。*Loech* は動詞 *lachen* 「笑う」の強変化の過去形である。ところが散文では同じ動詞の弱変化の過去形 *lachede* が使われ、韻が打ち消されている。動詞 *lachen* は強変化および弱変化の過去形をもつ動詞であり、とくに弱変化の過去形は東部地域またホラント地方の文献に現れるとされるので¹³⁾、Pg の作者が作品の成立したゴータの方言にしたがって修正を施したとも考えられよう。ただしこの用例は少なく、ほかに一例を確認したのみであった (RH 6982:claff → Pg cleuede < cleven 「張り付く」)。

(d)押韻している語について文法的な変更を加えた例

(28) RH (771 - 774)

Dese maer spranc uut wel saen.

Int dorp en bleef oec wijf noch man.

Ellic liep aldat hi lopen can

Ende droegen myt hem haer weer.

この知らせはすぐに広まった。村に残る男女はだれ一人おらず、誰もが全速力でやってきて、各自が武器を携行していた。

Pg (20)

Die mare die spranck over al den dorp. daer en bleef wijf noch man si en liepen al daer toe als si eerst conden. elck mit hoeren ghewere

この知らせは村中に広まった。村に残る男女はだれ一人おらず、誰もができる限り早くやってきて、各自が武器を携行していた。

韻文と散文を比較すると、「全速力 can」の部分で過去複数形の conden に変えられているのがわかる。韻文では主語が、「誰もが ellic」を受けて三人称単数の代名詞 hi となっているのに対して、散文では三人称複数の si を主語として文を作っているからである。「誰もが全速力でやってきて」という箇所を文法上の単数ととるか、実際上の複数ととるかの違いを利用している。

(29) RH (7147 - 7150)

Die wolf die dit niet wel en behaechde,

Sloech na hem eer hi ontginck,

So dat hi en in sinen arm vinck

Ende hielten vast, oec hoe hi bloede.

これが癩に障った狼は、狐が逃げる前につかみかかり、腕のなかに捕まえて、どんなに出血しているようがしっかりと離さなかった。

Pg (142)

Den wolue en behaechde dit niet wel. ende hi slooch nae hem eer hi hem ontghinc ende hi vincken in sinen arme ende hi hielten vast oeck hoe sere dat hi bloede

これが癩に障った狼は、狐が逃げる前につかみかかり、腕のなかに捕まえて、どんなに出血しているようがしっかりと離さなかった。

韻文にある「腕のなかに捕まえて so dat hi en in sinen arm vinck」において、en は「彼を」を意味しており、訳文では省略されている。この en は、散文では動詞 vinck の末尾に接合している en であり、語としての独自性を失っている。このように前の語の末尾に冠詞あるいは代名詞などが接合することを enclisis という¹⁴⁾。散文は、この enclisis を使って、巧みに vinck を vincken と変えて韻を打ち消している。

(e)語順を正しく直した例

(30) RH (6193 - 6199)

Ic meen het was tegen dit ongeval

Dat my leider was so naer.
 Alle die meeste hoop die was daer,
 Die Reynaerts tael hebben gehoort
 Van juwelen ende hoe hy voort
 Dair op stercte sijn gelaet,
 Meenden dat was sonder beraet

それは、残念ながらわたしの間近で起こったこの不幸の前触れであったと思います。」居合わせたほとんどの者は、ライナルトの宝石話を聞いて、そして彼がさらに確信に満ちた表情をしたのを見て、うそ偽りないと思った。

Pg (123)

Het heeft entelic dit ongheual gheweest dat mi dat aldus nae was Als die meesten hoep die daer waren die woerde van reynaer gehoert hebben vanden iuwelen. ende hoe hi voert sijn ghelaet daer op stercte die meenden dat hijt onuersienlic dede

これほど失神が間近に迫ったのは、きつとこの不幸のせいであったと思います。」居合わせたほとんどの者は、ライナルトの宝石話を聞いて、そして彼がさらに確信に満ちた表情をしたのを見て、悪意がないと思った。

韻文にある下線部と散文に引かれた下線部を比較すると、どの箇所も下線部内の語の順序が入れ替わっているのがわかる。韻文では行末に韻を合わせた特定の語を配置するので、散文に見られるような語順の規則が守られない。そうした場合、散文では逆に語順をふつう通りに戻す必要が出てくる。下線部はいずれも副文内にあるもので、通常は定動詞後置の語順となるべきところである。したがって、散文はいずれも語順を正しく直すとともに、韻の解消を図っている。

(f)文や単語を入れ替えたり、追加したりして対韻を離れた例

(31) RH (6469 - 6472)

Hy aet liever dan hi zaach spynnen,
 Dan hi dronck een aem wijns.
 Doe ic hoorde, so jamerde my sijns.
 Jc seide: "ic zueck mijn bejach."

糸を紡いでいるのを見るより、ワインを一樽飲むよりも食べるのが好きなのでしょう。こう聞いて彼を憐れに思って「獲物を探してくる」と答えました。

Pg (128)

Hi aet lieuer enen slach wammen dan hij een aemme wijns droncke. doe ick hem sinen hongher aldus sere claghen hoorde doe iammerde mi sijns Ick seide mi honghert oeck ende ick soecke mijn beiach

ワインを一樽飲むよりも一人前の内蔵を食べる方が好きなのでしょう。彼がそれほど空腹を嘆くのを聞いて、彼を憐れに思って「私も腹が減っているから獲物を探してくる」と言いました。

「ワイン wijns」と「彼を sijns」が韻を踏んで連続した二行にある。散文ではその間に「彼がそれほど空腹を嘆くのを hem sinen hongher aldus sere claghen」が入って両者の間隔が広げられた。韻を踏む二語はそのまま残っているものの、両語が押韻しているのを感じにくくした例である。

(32) RH (4384 - 4392)

Men sel gedencken ouder daet
Ende myt besceide dair in voort gaen.

Ic zie hier noch so veel staen

Mijnre magen ende geslachten

Die luttel schinen mijns te achten,

昔の言動を思い出すべきで、分別をもってそのまま前に進むのです。わたしの親族や 一族 がここに大勢いるのが見えます。わたしをほとんど 気に掛けて いないようです。

Pg (87)

Men soude doch oeck ouder weldaet ghedencken. ende mit besceide daer in voert gaen Ick sie van minen gheslachte mijnre maghen hier alsoe vele staen die luttel schinen of si mijns yet achten.

やはり昔の善行も思い出すべきで、分別をもってそのまま前に進むのです。わたしの 一族 のなかでも親族がここに大勢いるのが見えます。わたしをほとんど 気に掛けて いないようです。

韻文では「一族 geslachten」と「気に掛けて achten」が韻を踏んで連続した二行にある。散文では、前行の句「ここに大勢いる hier alsoe vele staen」をその間に挿入して両者の間隔を広げ、前例(31)と同様の効果を生んでいる。

(g)行末に後置された数詞や所有冠詞、否定冠詞 (ne) geen また en geen、あるいは形容詞を文中に入れた例

(33) RH (395 - 399)

Oec brocht hi my een ander maer

Ende seide ons dat hi waer

Een begeben clusenaer

Ende leefde in penitentien swaer,

Hi had ontfaen om die sonden sijn.

さらに奴は別の知らせをもってきて、われわれに報告するには、自分は世を捨てた隠者で、自分の罪滅ぼしのために背負った厳しい苦行をしながら暮らしていると。

Pg (13)

Oec seide hi mi een ander maer. dat hi een begheuen clusenaer waer gheworden. ende dat hi ouer sine sonden swaer penitencie ontfaen woude

さらに奴は別の知らせを報告しました。自分は世を捨てた隠者になって、自分の罪滅ぼしのために厳しい苦行を背負うつもりだと言いました。

(34) RH (5906 - 5907)

Het waren die trouste vrienden tweeDie ic waen te krigen ummermee.そもそも得られると思う友人のなかで、もっとも信頼できる二人の友人でした。

Pg (117)

Het waren my twee alsoe ghetrouwe vriende als ic yummermeer waene te ghecrighenそもそも得られると思う友人のなかで、ひじょうに信頼できる二人の友人でした。

(35) RH (5371 - 5375)

So wair een woud by nachte gaen

Ende hi myt hem droech den steen,Hy en behoefte lights en geen

Van keersen, want hi zach

So wel oft wair schoon dach.

夜歩きをしようとする者はどこへ行くにも、この石を携行すると、燭光などなにもいません。晴れた日中のようによく見えるからです。

Pg (107)

soe waer een bi nacht gaen woude Naeme hi den steen mit hem hij en behoefde anders gheen licht Want sijn scheme die maecte den wech also licht oft schoon middach gheweest hadde夜歩きをしようとする者はどこへ行くにも、この石を携行すると、ほかに光などなにもいません。晴れた日中のようにその輝きが道を照らすからです。

前例の (30) と同様、韻文では行末に韻を合わせた特定の語を配置するので、散文に見られるような語順の規則が守られない。例文 (33) では付加語形容詞 *swaer* や所有冠詞 *sijn*、(34) では数詞 *twee*、(35) では否定冠詞 *en geen* (独 *kein*) が韻を踏ませる目的でそれぞれの名詞に後置されている。散文ではそれを修正して前置することで韻の解消が図られた。

(h)並列している語を入れ替えた例

(36) RH (5069 - 5074)

Als ander slapen, so zorgen sy zeer

Om haers heren vordel ende sijn eer,

Om wise vonden ende nauwen raetDat groten heren dicwil baetMeer dan cracht ende overmoet.Ende gelijc Reynaert doet,他の者が眠っているときでも、彼らは主君の利益と名誉のために、妙案や切れ味するどい助言のために粉骨砕身しています。それは、大諸侯たちにとって権力や大胆さよりもしばしば有益なものです。まさにライナールトもそうしているのです。

Pg (101)

Als die andere droncken vol snorken ende slapen soe sorghen si ende bedencken nae vordel ende ere hoers heren Om wijsen raet ende om wijse vonden datten here dicke mere baet dan homoet ende cracht Des ghelijke soe doet Reynaer

他の者が酔っ払ってさんざんイビキを掻いて眠っているときでも、主君の利益と名誉のために、切れ味するどい助言や妙案のために粉骨砕身して考えています。それは、諸侯たちにとって高慢さや権力よりもしばしば有益なものです。まさにライナールトもそうしているのです。

本来「助言 raet」と「有益 baet」、「大胆さ overmoet」と「している doet」が韻を踏んでいる二語である。押韻を解消するために散文では、「助言 raet」と並列している語「案 vonden」の順序を逆にして、同じく「大胆さ overmoet」と並列している語「権力 cracht」を入れ替えている。散文では「高慢さ homoet」に変えられているものの、「大胆さ overmoet」と「高慢さ homoet」とでは韻は変わらない。このように、連続していた韻を踏む二語のうち一方の順序を変えて、本来の押韻をわかりにくくするという手法が見られる。

(37) RH (4941 - 4944)

"Dats vanden genen die selve plegen

Te moorden, te stelen ende te roven.

Aldat sy sweren off geloven,

Dat en houden sy myn noch meer.

それはあの連中の判決だ、みずから殺害やら盗みや強盗やらを普段からしている連中だ。自分で誓ったことや約束したことも全然守らない。

Pg (98)

ya dat is vanden ghenen die selue plegen te moerden ende te rouen Allen dat si gelouen ende sweren dat en pleghen si niet te houden

ああ、それはあの連中の判決だ、みずから殺害やら強盗やらを普段からしている連中だ。自分で約束したことや誓ったことも守らないのが普通だ。

前例 (36) と同様に、「強盗 roven」との韻をわかりにくくするために、「誓った sweren」と「約束した geloven」の順序が散文では逆にされている。

(i) 韻文と散文でほとんど変化のない例

(38) RH (4370 - 4375)

Al wair ic geoordelt totter doet,

Nochtan soud men mijn tael horen.

Ic heb u doch hier te voren

Mennigen nutten raet gegeven

Ende ic bin ter noot bi u gebleven

Dicke, dair u die ander ontweken.

わたしが死刑判決を受けたとしても、発言を聞くべきです。わたしは貴方に、これまで多くの有益な助言をして、貴方が苦境にある時でもよくおそばについていました。逃げ出した者もいた時にです。

Pg (87)

al waer ic veroerdelt totter doet nochtans soudemen mijn woerden wt horen Ic heb doch hier te voeren menighen nutten raet ghegheuen. ende ter noot altijd bi v ghebleuen daer v der andere vele ontweecken

わたしが死刑判決を受けたとしても、発言を最後まで聞くべきです。わたしは貴方に、この場でこれまで多くの有益な助言をして、貴方が苦境にある時はいつもおそばについていました。逃げ出した者も多くいた時にです。

韻文と散文を比較してみると、ほぼ全文がなにも変わっていない。こうした事例も存在することを指摘しておきたい。ただ、この(38)の例では、「これまで voren」を除けばすべて動詞の不定詞あるいは過去分詞が行末に来て韻を踏んでいる。こうした文は現代語でもふつうに見られるもので、あえて韻を解消する必要性を認めなかったのか、あるいは動詞の不定詞や過去分詞は、韻を打ち消すために変えるのが困難なのか、判然としない。対韻をなす語が二つとも残っている場合をより詳しく検討した結果が第二表である。

第二表

	(a)つづり方を少し変える	(b)異形を用いる	(c)(d)文法的変更 (強変化・弱変化含む)	(e)語順を正しく直す	(f)入れ替えや追加により距離を離す
個数	297	95	188	322	256
百分率	19,4%	6,2%	12,3%	20,9%	16,7%

	(g)数詞や所有冠詞の文中入れ	(h)並列語の入れ替え	(i)ほとんど変化なし	計
個数	48	33	295	1534
百分率	3,1%	2,2%	19,2%	100%

(重複分 46 を含む、よって個数は 1534 - 46 = 1488)

(7) まとめ

第一に、A の対韻をなす語が残らない場合からさまざまな事例分析をはじめた。そこで示されたのは、全行削除というのは、物語のあら筋を変えたり (例文 (5))、新たな章立てに際して物語の体裁を整えたり (例文 (6) (7))、例文 (8) のように挿入句のようにあら筋に関係しないと思われる行を削除して物語の流れをすっきりさせたりするなどの目的をもつことであった。押韻の解消が必ずしも第一の目的というわけではない。脚韻が二つとも削除されている例では、韻の解消が第一に意

図されていると思われる事例（例文（9）（12））や、韻の解消とともに冗長さを避けたり（例文（10））、例文（11）のように韻を合わせるために行末に添加された語を削除したりする例が見られた。ただし以上の事例は全体の6,3%と少ない。対韻が二つとも変更された事例、あるいは対韻の一つを変更していま一つを削除した例文（13）（14）（15）では、とくに意識して韻の解消を図ったという印象をつよく受ける。

Bの対韻をなす語がともかく一つ残る場合が、全体のほぼ半分を占めて最大の割合であった。挿入句的なものを削除して、話の流れをすっきりさせる例（16）、固有名の後についている形容辞を削除する例（17）、行末の短い副詞（*zeer*, *saen*等）などを削除する例（18）などが認められた。これらは、韻文の必要性からいわば物語の筋に添加されたものであって、散文で削除されたのももつともである。とはいえ、以上のような韻文の特殊性がなくとも、韻を踏む二語のうち一つを変更して一つを残すような韻の解消はふつうに見られる（例文（19））。

韻を踏む二語がそのまま残っているCの例にしても、その事例を子細に検討してみると、さまざまな工夫によって押韻の解消が意図的に図られていることが判明した。その方法はじつに多岐にわたり、(a)押韻している語のつづり方を少し変更した例（20）（21）（22）、(b)押韻している語の異形を用いた（23）（24）（25）（26）、(c)動詞の強変化と弱変化の違いを利用した（27）、(d)押韻している語について文法的な変更を加えた例（28）（29）、(e)語順を正しく直した（30）、(f)文や単語を入れ替えたり、追加したりして対韻を離れた（31）（32）、(g)行末に後置された数詞や所有冠詞、否定冠詞（*ne*）*geen* また *en geen*、あるいは形容詞を文中に入れた（33）（34）（35）、(h)並列している語を入れ替えた（36）（37）などがあった。ただし、(i)の韻文と散文でほとんど変化のない例（38）も存在しており、それはCのなかの19,2%を占めていた。しかし全体での割合とすればおよそ7,6%とわずかな割合でしかない。

このような分析結果から判断すると、散文版の作者が様々な方法を駆使して、韻の解消に努めていたことがわかる。最後のさしあたり説明不能で韻が残った事例については別のより詳しい分析が必要であるとはいえ、「どちらかといえば一部の単語を変えて語順を変更しつつ、押韻している語を部分的に削除しただけの元々のテキストにほかならず、押韻している語はなお散文の随所に見られる。……したがって作品固有の価値ならびに作者の文学上の功績に乏しい。その仕事に特徴的なものはほとんどない。」（Muller/Logeman 1892:16 前出）といったかつての散文版に対する低い評価は改めるべきであろう。むしろ、一作品で3860にも及ぶ対韻に直面して、文体的および文法的方法を可能なかぎり用いてその解消にあたったというのがふさわしい。

韻文から散文への移行期に、韻文がどのように解消されて散文となり、また初期の散文がどのような言語の可能性を駆使して作り上げられたのかを研究するうえで、散文版『ライナールト物語』は格好の資料だといえる。

注

- 1) 文献情報は *CD-ROM Middelnerderlands*. Den Haag/Antwerpen 1998 によった。ただし『ライナールト物語』（Reynaerts historie, RH）の成立年代については諸説あり、研究者の一致を見ていない。詳細は Wackers 2002:327ff. 参照。使用したテキストは以下の通り。『ライナールト物語』韻文版は *Reinaerts historie, Deel II*. Wackers 2002 による。『ライナールト物語』散文版については *CD-ROM Middelnerderlands*. Den Haag/Antwerpen 1998 に所収されている *Historie van Reynaert die vos, Proza-Reinaert* を用いた。ただし、散文版の句読法および校訂は Muller/Logeman 1892 にしたがった。

- 2) 本論は、2010年9月25日にキャンパスプラザ京都において、京都ドイツ語研究会の主催による発表会で行った口頭発表に加筆また修正を加えたものである。
- 3) 本論にあげた例はほんの一部であり、事例は任意に増やすことができる。また例文でRHのあとにある括弧内の数字は当該行を表し、Pgのあとにある括弧内の数字は当該頁を表す。
- 4) 「悪妻 van quaden wiue」は「悪しき毒物 van quaden venine」の誤植かもしれない。韻文版『ライナールト物語』の当該箇所は「毒物 venijn」(5386行)、キヤクストン版でも同様に「venym」(Blake 1970:77)となっているからである(Muller/Logeman 1892:188参照)。ただここでは原文のまま訳しておく。
- 5) Helten 1887 (1973):321参照。
- 6) MNW II:sp.17,35参照。
- 7) ライナールトの神秘主義については Wackers 1997: Paul Wackers, Reynaert as Mystic Function and Reception of a Passage from *Reynaerts Historie*. In: *Reinardus* 10 (1997) S.169-180. を参照されたい。
- 8) MNW II:sp.977,990参照。
- 9) Van Loey 1980:I:94参照。
- 10) Van Loey 1980:II:pp.99参照。
- 11) Bracht はオランダ東部の沿岸域の形態で、brocht はドイツ寄りの西部地域の形態だとされる(Berteloot 1983:I:52, II: 地図 12参照)。ただ地図には、ゴードの状況については記載されていない。
- 12) Van Loey 1980:I:92参照。
- 13) Van Loey 1980:I:81参照。
- 14) Le Roux 1945:pp.39参照。

参考文献

- Berteloot 1983: Amand Berteloot, *Bijdrage tot een Klankatlas van het dertiende-eeuwse Middelnederlands, I.Tekst, II.Platen*. Gent 1983
- Blake 1970: N.F. Blake, *Caxton The History of Reynard the Fox*. London/New York/Toronto 1970
- Breul 1927: Karl Breul, *The Cambridge Reinaert Fragments (Culemann Fragments)*. Cambridge 1927
- CD-ROM *Middelnederlands*. Den Haag/Antwerpen 1998
- van Helten 1887 (1973): W.L. van Helten, *Middelnederlandsche Spraakkunst*. Groningen 1887, Unveränderter Neudruck der Ausgabe von 1887, Wiesbaden 1973
- van Loey 1980: A. van Loey, *Middelnederlandse Spraakkunst. I Vormleer; negende druk, II Klankleer, achtste druk*, Groningen 1980
- Martin 1874: Ernst Martin, *Reinaert Willems gedicht Van den Vos Reinaerde und die Umbearbeitung und Fortsetzung Reynaerts Historie*. Paderborn 1874
- MNW: E. Verwijs/J. Verdam, e.a.: *Middelnederlandsch Woordenboek I – XI*. 's-Gravenhage 1885-1952
- Muller/Logeman 1892: J.W.Muller/H. Logeman, *Die Hystorie van Reynaert die Vos, naar den druk van 1479, vergeleken met William Caxton's Engelsche vertaling*. Zwolle 1892
- Le Roux 1945: T.H. Le Roux/J.J. Le Roux, *Middelnederlandse grammatika*, Tweede verbeterde druk. Pretoria 1945
- Schlusemann 1991: Rita Schlusemann, *Die hystorie van reynaert die vos und The history of reynard the fox*. Frankfurt/Bern/New York/Paris 1991
- Schlusemann/Wackers 2005: Rita Schlusemann/Paul Wackers, *Reynaerts historie*. hrsg.und übersetzt von Rita Schlusemann und Paul Wackers, Bibliothek mittelniederländischer Literatur, Band 2, Münster 2005
- Vriesema 1980: Paul Vriesema, Gheraert Leeu en „Die hystorie van Reynaert die vos." De „Reynaert" als Prozaroman, in: *De letter doet de geest leven*. Bundel opstellen aangeboden aan Max de Haan bij zijn afscheid van de Rijksuniversiteit te Leiden, hg. v. Vakgroep Nederlandse taal- en letterkunde, Leiden 1980, S.73-84.
- Wackers 1997: Paul Wackers, Reynaert as Mystic Function and Reception of a Passage from *Reynaerts*

Historie. In: *Reinardus* 10 (1997) S.169-180.

Wackers 2002: Paul Wackers, *Reynaert in tweevoud, Deel II Reinaerts historie*. Amsterdam 2002

Wackers/Verzandvoort 1989: P. Wackers/E. Verzandvoort: *Bewerkingstechniek in de Reynaerttraditie*. in: *TNTL (Tijdschrift voor Nederlandse Taal- en Letterkunde)* 105 (1989) pp.152-181

(本学文学部教授)